

市芦救援会通信

市 芦 救 援 会 通 信 通巻108号 01/09 <1部100円> 発行人 玉本 格
市 芦 救 援 会 〒 659-0001 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 0797(32)1131
市芦反彈圧闘争を支援する会 〒 650-0022 神戸市中央区元町通5-3-16 テーラービル3F

9・7「市芦の存続を求める」街頭署名と街頭宣伝（JR芦屋駅）
9・9「市芦があつて何が悪いねん！市民集会」

卒業生・市民・教員の有志が、その周辺の人々の協力を得てコツコツと集めた「市立芦屋高校の存続を求める署名」の第一次集約三〇三四名分を、八月一六日一〇時に、「市芦があつて何が悪いねん！市民の会」の三名が市民を代表して芦屋市教育委員会に提出しました。

代表は一市芦がなくなると、高校に行けない子どもたちが増える。定員内で三三名や二五名も落とされたとき、そのうちの何人かの子どもにつき合ってきたが、彼らが社会的に独り立ちするのに、倍する努力と時間が必要だった。市芦をつぶすことよりも、高校に行けない子どもたちをださないようにすることを教育委員会は考えて欲しい」と、署名に込められた思いを教育委員に伝えるよう、対応した芦屋市教委佐藤管理部長に強く申し入れました。

佐藤管理部長は「この署名が提出されたことについては明日の協議会で報告します」と約束し、署名用紙を受け取った。

市芦廃校が何を意図しているのか。財政危機、少子化、県の高校教育改革等を市芦廃校の理由として芦屋市教委は挙げるが、市芦廃校の真の目的が別のところにあることを卒業生たちは見抜いている。だから、これまでも卒業生からさまざま文章が寄せられてきた。市芦の真実を語る卒業生たちの文章は格調高く、市教委や学教審、一部の議員・市民の劣な市芦への誹謗中傷を凌駕している。

私たちは、市芦の真実を語り続けることで、市教委が市芦の何を抹殺しようとしているのかを明らかにする。市芦の卒業生たちの苦闘を文字に刻みつけることで、市教委の市芦廃校の謀略を断罪する。

も／く／じ 市芦救援会ホームページ <http://homepage1.nifty.com/i-kyuenkai/>
Eメールアドレス i-kyuenkai@nifty.com

市芦の存続を求める 3034 名の署名提出	救済会事務局	1
最後まで闘える自分でありたい	19 回卒業生 浦山京子	2
何ものにも代え難い市芦高校の存続を求めます	33 回卒業生 木村陽菜	2
『いも虫の唄』が聞こえる	19 回卒業生 K・K . . .	4
私の中に生き続ける「市芦」	19 回卒業生 K・K . . .	8
奨学金に張り付く私の生活史	19 回卒業生 S・K . . .	9
9 月 9 日 (日) 「市芦があって何が悪いねん! 市民集会」		12

卒業生の声 市芦があつて何が悪いねん!

最後まで闘える自分でありたい

第一九回卒業生 浦山 京子

私が市芦を卒業し一八年余が経った。その間には、私自身も社会に出ていろんなことに出くわし、市芦も「教育改革」という名のもとに「なんでやねん?」と思うことがさまざま起こった。

高校時代、奨学金をとり奨学金闘争から『いも虫の唄』の劇をした。そのとき、「自分を問い直し生きていく」その本当の力は、一〇年後、二〇年後の姿にある」といわれ、「いも虫」は一生かけて羽化させていくものだ」という言葉を思い出して、いま市芦の危機に立たされ、自分の生き方を問われ、問い直すときのような気がしている。

それにしても、二〇年ほど前、私たち「いも虫」を産んでくれた先生が、今の自分と同じ年代の頃であつたかと思うと、そのエネルギーに改めて「産みの苦しみ」を察して感謝の思いでいっぱいになる。

と同時に、私にとっての市芦、そこで

出会った仲間や先生、そこから知ったそれぞれの気持ちや人としての生き方、それは自分の原点になっている。だから私は大事にしたい。

市芦の三年間があつたから、支え合うことや人とのつながり、自分自身が一生懸命生きていくこと、自分を裏切らないことでそこから誰かを励ましたり共に生きていけるようになれば、と思うようになった。自分の言葉で伝え最後まで闘うことの意味を学んだ奨学金闘争。市芦は私にとって誇りである。

とはいえ日々の現実には、子育てに、仕事にとあわただしく流れていく毎日。「なんでやねん?」の怒りも「こんなものか?」みたいなあきらめに変わつてみたりもする。ただそんなときでも「そうはさせない!」といわんばかりに救済会通信が送られてきたり、おまけに何を思ったのか『いも虫の唄』の脚本まで送ってくる先生もいる。何ができるかといえど、考えてしまふけれど、自分にできることは確実にしていこう、あきらめないで最後まで闘える自分でありたいと思う。二人の子どもにはどんな環境にも負けずに生き抜いていく力をつけてほしいな

あと願うし、人として大切なことを刻みつけながら育ってほしいと思う。だから市芦の存在は必要なのだ。市芦を知らない人たちにもっともらしい廃校の理由を並べられてたまるか!!と思うから。私はいつか羽化できる「いも虫」であるために、私は精一杯、自分に負けることなく頑張っていきたい。

何ものにも代え難い市芦高校の存続を求めます

第三三回卒業生 木村 陽菜

私は市立芦屋高校廃校に反対し、市立芦屋高校の存続を強く求めます。

私が市立芦屋高校廃校というのを耳にしたのは、約三ヶ月前です。聞いたときは驚きました。しかし、廃校の理由が土木事業優先による財政難での経費削減のため。はつきり言って腹が立ちました。

汚職のために廃校になるなんて、経費削減のために廃校になるなんて。経費削減ならもっと別のところですればいい、というのが私の心情です。

廃校反対の署名を集めているときよく聞かれた言葉が、私の心情と同じで「経費削減が市立芦屋高校の廃校につながるのか?」「他に削減すべきところがある

のでは?」といった声でした。そして、

「市立芦屋高校が廃校になったら、学校へ通える子が減るのでは?」といった声も聞かれました。最後に皆、口をそろえ「母校をつぶさないで」と強く言っていました。

私自身、経費削減が市立芦屋高校の廃校につながるのかというのが、よくわかりません。なぜ経費削減が廃校につながるのでしょうか?今一度、どうしてそうなるのか、経費削減なら、もっと別に削減できるところはないのか、と問い質してみたいと思います。そして、市立芦屋高校がつくられた意味を思い出して頂きたい。「できるだけ多くの子どもたちを高校へ」という願いがこめられていたはず。市立芦屋高校が廃校になれば、その分、高校へ進学できる子どもの数が減ることです。

私は市立芦屋高校でいろいろなことを学びました。ただ学校へ通っていたのではなく、ボランティア・クラブ活動を通して、人との関わり合いの大切さ、教科学習では、わからないことをわからないと聞く大切さ、いろいろなことを通し、先生方に支えられ、友だちに励まされ、自分自身のことをよく知りました。私が成長してきた過程で一番の思い出深い時期です。

市立芦屋高校は、「人間」を学ぶ「自

己」を学ぶ特徴ある学校とし、より充実・発展させていくべきです。私たちの母校であり、これからの高校である市立芦屋高校の存続を心より求めます。

卒業生の語る市芦高校の真実を聞け!それでも市芦をつぶすのか

敵意と侮蔑に包囲されて市芦高校に通い続けた生徒たちは、日々が闘いの連続であつた。奨学金闘争を通して人としての尊厳を取り戻した奨学生たちの発言は、市芦高校の生徒たちと市芦高校が置かれた位置を正確に表現している。と同時に、彼らは市芦高校の真実を自らの体を通して訴えている。

以下のセリフは、劇『いも虫の唄』の中で語られた生徒の生活史そのものである。

【S・K】

そうや。私はいも虫や。お父さんも、お母さんも、木から落ちたいも虫のように、地べた這いずり回って生きて来たんや。お父さんは何回か仕事変わって、今は、お茶を入れてくれる人もいない、たった一人の出張所で、右半身のしびれを我慢して、会社の仕事を、全部自分だけでやってる。お母さんは、白血



安売りのチラシ片手にショッピングカーをひいて、一円が無駄も惜しんで、買い物に出かけていた。私は、そんな親からできた地べたのいも虫や。

【K・N】

高校に入った頃の私は、本当に弱いいも虫やった。空の給食袋を持っていく恥ずかしさ。着ていく服がなくて学校を休んだ恥ずかしさ。その恥ずかしさが全部一緒にあって、奨学金を取ることに恥ずかしさになつてた。奨学金を取っているのが、ばれるのが怖かった。

私は、市芦へ入学して初めて、奨学金を取っていることを、みんなの前で言った。話していること一つもなかったけど、もうかくさんでもええんやと、気持ち少しだけ楽になつた。

私たちの親は、みんな汚いかつこうして働いている。私たちが自分の話したり、自分の親の話しても、そんなこと私らに関係あらへん

れるままに、「私の家もこれから生活苦しくなるだろう」と、ただぼんやり考えながら申請しました。

いざ奨学金を取り始めると、周囲の目が気になってきました。先生に呼ばれて奨学金をとり職員室に行くとき、まわりに友だちがいたら、「なんか聞かれたらどうしよう」と思い、奨学金を渡されてもみんなにわからないようにカバンに入れていました。友だちから「なんやっただ？」と聞かれても、「ちよつとね」などと言いながらごまかしていました。

電気スタンドをもらって帰ることがありました。大きな段ボール箱を提げて帰る私を見て、「何もってるんやろう？」と、ものめずらしそうに振り返っていききました。一緒に帰った友だちからも、「何？何でそんなもんもらったん？」と聞かれ、「お父さんがいないから」と言っただけ、あとは笑ってごまかしていました。そして、「お父さんがいなくて得やね」と言われて、恥ずかしさと腹立ちで早く家につきたかったのを覚えています。

私は、奨学金を取っていることで、自分ひとり恥ずかしい思いをしているような気がしていました。だから奨学金とつてることを普段は気にせずにいようとしてきたし、少しくらい恥ずかしい思いしてもごま化してみんなと楽しくやってい

れば良かったのです。

奨学生集会の中で出会ったもの

市芦に入学し、しばらくしてホームルームで自己紹介をしました。みんな家のことや自分のことを話していききました。他の子が、「奨学金のこと言う？」などと言いつつ合っているのをそばで聞いて、そんなこと言っても哀れみかうだけと思っていました。それでもクラスの中に自分と同じように奨学金とっている子がいることは、自分ひとりで隠れて奨学金もらうこともないだろうと思えば気は楽でした。

それから私は奨学生集会と出会いました。はじめは何をするのかもわからず、行かなあかんやろうという気持ちと、クラスの子も行くからという気持ちで集会に行きました。そしてワケのわからないまま、「集会に出て頑張りたい」と言っていました。

集会では他の子が自分の家の話などを述べていて、私にも家の話をしろと言われました。「何でわざわざこんな話するんやろう」と思っただけ、本当は、それまで奨学金のことや家のことなんか考えないようになってきたし、考えることもないと思ってきた私には、何も話ができませんでした。

何度か集会に出て、先輩の話や他の子と話を聞いている中で、奨学金を取っていることがわかるようになってきました。奨学金取っていったら、お金もらっていただけじゃないんだと思いはじめてきました。

だけど集会に出ていつも聞いているだけで、自分の話をしないといけないと思っても何をどう話せばよいのかわからず、それがイヤで集会に行く足が重かったのです。集会がある日は、奨学金を取っていない他の友だちが帰っていくのをうらめしそうに見ていました。

集会の話の中で自分とどのような話に出会うこともありました。そして、話を聞きながら、自分も奨学金とって恥ずかしい思いをしてきたことから目をそらしてはいけないうると思いました。そうしなければ、自分もまた奨学生の話と同情心でうわべだけで聞いてしまおうと思いません。

集会で聞くみんなの親の姿は、身体悪かったり、仕事うまくいかなかったりして、家にお金がなくなり、そのことで家族のあいだがしっくりいかなくて荒れている。はじめはそんな話を、荒れているのは弱いからだと思ってきました。

私の母は、父が死に四〇歳を過ぎてから働き始めました。朝起きて朝食の用意や掃除、そしてお弁当も毎日作ってくれ

つて無視されたり、かわいそうやと哀れんだり、同情されるだけかもしれへん。でも、その貧しさや、汚さを晒したとき、怖がっていたものから、自分を解放できるような気がした。

自分の気持ちが解放されてくると、親が必死で生きてきた姿が見えてきて、汚いかわいそうした親が、きれいに見えるようになってきた。

【K・K】

今年六月、M・K君とS・Kさんが、奨学金落とされてから、私たちは、半年間、奨学金闘争を続けてきた。そして今、この二人に、奨学金が支給されることまでできた。でも、この闘いの中で、たくさんの子が脱落していった。私らにとつて、申請文を書くということは、自分自身の総括であり、自分の生活さけ出して文章かくいうことは、正しいことやった。それでも、一生懸命書いてきた。

五人の子が落とされたとき、私たちは、申請文読まれてへんという怒りを表明し、市教委に抗議した。

申請文を書くこともしんどいことやけど、闘いを組むことは、もつとしんどかった。

落とされた子が疲れていくのがわかる。その姿みてたら、自分たちまで疲れてきそうになる。私たちの抗議は無視された。収入基準に押し切られたもどかしさ。何話しても通じない……、そんな気持ちが広がり、集会の

集まりも悪くなっていた。

大きな力の前に、私たちは、いも虫のように、踏みつぶされそうになっていた。でも、今ここで負けるわけにはいかなかった。私たちの小さな力は、何度もつぶれそうにならなから、ここにたどり着いた。

この闘いの中で、私たちに残った最大の財産は、私たちが、少しだけ、図太くたくましくなったことです。

劇『いも虫の唄』を演じた生徒たちが書き残した文章の一部を紹介する。

第一九回卒業式答辞より

『いも虫の唄』が聞ける

第一九回卒業生 K・K

包囲された市芦、強いられただけで恥ずかしさ

私は市芦に入学するまで、市芦についてのいろんなうわさに迷って、自分で勝手に市芦という学校を形づくり、不安を持ったまま入学してきました。

中学三年で進路を決めるとき、どこに行くか迷っているとき担任の先生に市芦に行くことをすすめられました。「市芦はアホの行く学校や」「市芦なんか行ったらまともに勉強できへん」などと聞いて

いたので、「市芦なんか行きたくない」と思っていました。家には私立に行けるようなお金もなく、あまり勉強もできなかったから県立や県南も無理でした。

市芦を受験することに決めただけで、友だちには「市芦なんかやめときい」と言われるし、また友だちの中には市芦に行くこと決めていても途中で変える子もいました。家にお金が無くて無理して私立に行く子もいたようで、私はそんな中で自分だけが取り残されていくようで不安でした。そのうえ、市芦受験の日に、「母子家庭の子は入りやすい」などと言われて、そんなふうに見られていたこともイヤでした。市芦に入学して最初のころは、制服を着て歩くことさえも「市芦生や」とまわりから馬鹿にされているようで恥ずかしかったです。

こんな私も、市芦で三年間過ごすあいだに少しずつ変わってきました。みんなが三年間のそれぞれの思い出を卒業論文に書いています。いろいろな行事を通しての思い出もあります。そして私にとつて、三年間最も大切に一番大きな影響を受けたのが奨学金でした。

私は中学二年のときから奨学金を取り始めました。奨学金を申請したのは中学一年のとき父が肝臓ガンで死に、母が一人働いて生活して行かなくてはならなくなったからです。そして先生にすすめら

ら最後までやり遂げました。劇は成功し、みんなから「良かったよ」と言われました。

私たちにとっては、この劇は半年間の奨学金闘争の続きであると同時に、三年間の奨学生集会での闘いそのものでもありました。集会在何度もつづれそうになり、「集会なんかサボって帰ろうか・・・」と何度も思いました。

でも、クラスの中に集会に出続ける子がいて、集会に出ては集まりが悪いと腹立ち、先生に何か言われるたびにイラだちながらも集会に継続して行きました。今まで来ていなかった子が来ると力が出て、来ていた子が来なくなると腹立ちを感じ、また投げやりになつてくる。そんな気持ちの繰り返しでした。何度もその友だちと文句を言い腹立ちながらも、集会に行き続けることで奨学生という立場を投げ出さずに済んだのだと思います。

そして、集会の中でよく話のできなかった私が、劇を終えたとき、自分がこれからは奨学生としての立場でみんなの前にのぞんでいかなければいけないと自覚できたように思います。

いちばんうれしかったのは、チョンさんに「良かったよ」と言われたときでした。今まで集会の中でチョンさんの話を聞いた総括文を読んできたけれど、自分が日本人としてやるべきことがはつき

りしないままでした。朝鮮人の子が就職差別にぶつかつたときも、私たち日本人はいい加減にしか就職や進学のことを考えていませんでした。「日本人やからちゃんとしてほしい、努力したらその分認めてくれるのに。」その批判に私たち日本人が応えていくには、私自身が自分の生き方を問い直すしかないことが本当にわかつたように思います。

立つべき位置に立つ

そして三年生では、ホームルームでまともな話し合いができないままです。ときに、劇を騒いでみていなかった子に対しケンカし、話し合いを持とうとする後輩がいました。それは私たちが今までクラスのホームルームの中でも「どうせわかつてくれない・・・」と思つて投げやりになつていた気持ちを変えていく力になつていきました。

これまで私たちは、「クラスでは話できる雰囲気違う」と言つて逃げてばかりでした。部落研の子がホームルームで話しても、クラスのみんなの聞き方がいい加減だと言いながら、結局何もせずいました。私自身、部落研の闘いを見ることで自分の奨学生としての立場がいい加減なことを自覚するのが怖くて、雰囲気だけにグチをこぼしてききました。でも私

らの闘いをまともに見て、クラスで動き始めていた子がいたことはうれしかったし、また私たちもいい加減なことが許されなくなつてきました。

三学期になり、市教委主催の青年の主張大会に再び『いも虫の唄』をやりました。その劇支援の呼びかけで、最後のホームルームで奨学金とつてきたことをクラスに初めて言いました。今まで「聞いていない」「わかつてくれない」と言つていたけれど、それよりも自分が奨学生としてこのクラスにいることを確かめていくことが大切だと思ひました。

劇を通して、今まで集会にもほとんど来なかった子がクラスの中で家の話をし、前には「家の話なんかしない」と言つていた子が劇を見て親の姿と考え合わせていく中で、卒業論文に親のことや家のことを丁寧に書いていきました。私たちは、最後のホームルームになつて、やっと奨学生としてクラスで動き始めることができたように思います。

そして、入学時は市芦生であることが恥ずかしかった私が、今では市芦生であることが自信につながつてきました。三年間かかつて私は自分が大切にしていくなすべきものを知り、それを見失わずに生きていくためには、自分の汚い部分や弱い部分をさらけ出して生きていくことから始めなければならぬことを知りまし

ていました。夕方五時過ぎに帰つてきて夕食の用意をし、夜は一時か二時頃まで仕事をしています。ひとりで生活に対する不安背負つて私たちを育て、「仕事があるだけでいい」と言い、一〇万円足らずの給料で毎日働いています。そんな母を私は暇つぶしに働いているようにしか見てきませんでした。

荒れているのは弱いからや、逆に真面目やたら苦労してへんからや、と物事をうわべだけで見てきました。自分の弱いところからも目をそらしてきました。それは、私が中学のころから保母になりたいと思つてきた気持ちの中にもありました。保母になつて身体の不自由な子や親のいない子の力になりたいと思つていました。でもそれは、「障害があるのに」という同情的な見方からきていました。市芦の障害研の子が毎日どんな気持ちで学校に来て、何をしているのか・・・私は何も知らないでいました。文化祭での劇ぐらいでしか障害研の活動を見ることもありませんでした。そんな私が障害児や親のいない子の中に入つていけるわけがないと思つたのです。保母になりたいという気持ちが同情で終わつてしまわないために、今の自分の生き方を問い直していくしかないと思ひました。

三年での奨学金闘争で最も自分を見つめ直すことができたと思ひます。奨学金を申請した中で五名の子が収入基準オーバーで落とされました。それは選考委員が私たちの書いた申請書をきちんと読んでいないということでした。

私にとつて奨学金は自分の生活を見つめ直していくものであつたのに、それを数字だけで切り捨てるなんて許せないことでした。申請文は、奨学金を申請したそれぞれの子が、いろいろな問題にぶつかりながらも、自分の生活をさらけ出して一生懸命書いたものです。このまま認めてしまつては、私たちの生活や気持ちは無視されたままになつてしまふと思ひました。

しかし、収入基準だけで押し切られ、「何話しても通じへん」というもどかしさに、私たちはイラだちました。落とされた子は奨学金申請に自分の再出発をかけていただけに、それをつぶされて自分の生き方が見えなくなり、疲れていくのがわかりました。その姿を見てみると、私たちまで疲れてきそうになり、私自身も投げやりな気持ちになつていました。でも、負けたら「お金だけの奨学金になつてしまふ」と思ひ、自分自身を総括することで闘いを続けていくことだと思ひました。奨学生通信を何度か書く中で、

集会が自分のものになつてきて、自分のやるべきことがわかつてくるようになりしました。

集会在何度もつづれそうになりながら、なんとか奨学金闘争を続け、落とされた二人に奨学金が出るところまできました。

三年の文化祭では、奨学金闘争の続きとして奨学生の劇『いも虫の唄』をやりました。でも劇をやりきるまでには、それぞれのの中にいろいろな迷ひがありました。「劇をしても同情されるだけや」「みんなまともに見てくれへん」という気持ちで克服できず、練習も何度か中断し、話し合いを持たなければならませんでした。

毎年、文化祭では朝文研や部落研が劇をしています。自分を「部落民や」と言い、「朝鮮人や」と名乗る。それは私たちにわかつてもらおうという前に、自分自身が部落民として朝鮮人として生きていくんだという自覚を持つていくことだと思ひます。そのしんどさがどんなものか、私たちはわかりきれないと思ひます。でも、私たちがそれをわかつていくためにも、自分自身を問い直す劇から逃げないでほしいと思ひました。

それでもまだ迷ひは続き、練習の集まりも悪いままでした。そして、たつた二人の力は何度もつづれそうになりなが

た。

今クラスを見つめ直すと、ものが話せないまま卒業していく子、学校をやめていった子、自分の生き方が見つけれず崩れそうな子もいると思います。私はその追いつめられていつてる子のしんどさをみれずに、自分自身のこともあいまいにしてきました。そんな自分を問いただし、ただの人助けと同情で保母になろうとするのではなく、精一杯自分自身と向き合っていく中で、保母になつていかなければいけないと思っています。

卒業してから一生涯懸命勉強して責任の持てる保母なることが、必死で働いている母の仕事が無駄にせず、母の気持ちにむくいることだと思っています。

私は市芦でいろんなことを考え、学んできました。私たちの誰かが追いつめられたとき、持ちこたえ、支え合つていくために、そして自分にとって大切なものを見直していくために、ホームルームや奨学生集会があるのだと思います。

私たちの学年は、そのようなホームルームを十分すすめていくことができず、進路に対してもいい加減にしか考えていかなかったために、これからの自分の生き方を見つけれず、将来に不安を残したままになつていけるともあります。しかし私たちはこれから社会の荒波の中で生きていかなければなりません。そんなとき

少しでも、この市芦で学んだことを大切にしていきたいと思っています。

後輩の皆さんは、これから進路のことなどで悩んだり、迷つたりすることもあると思います。でも、どんなときにも自分をしっかり見つめ、そしてホームルームの中で、みんなで支え合い、それぞれが精一杯の力を出せるように頑張つてほしいと思います。

「救援会通信より再掲」

私の中に生き続ける「市芦」

第一九回卒業生 K・K 1986

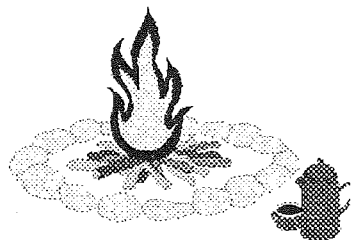
「キタセンセ、オハヨー」とたどたどしい言葉と笑顔で迎えてくれる子どもが可愛くて思わず笑つてしまう日々の中、乳児院で働き四年余が過ぎた。働きはじめた頃は、生後一週間も経たない小さな身体に、二四年半前の自分と照らしあわせることもできず、コワゴワながら接していた。生後間もなく、どこかの病院の前におかれ、必死で泣き叫んでいたであろう赤ちゃん。お腹がすけばゴクゴクと無心にミルクを飲んでいく。その身体からは考えられないほどの生命力に、ふと驚かされたりする。

遺棄、置去、虐待、両親の離婚や家

で出逢つてきた仲間、そして自分自身の思いだけは裏切らず、働いていきたいと思う。自分のまわりで、いろんな人が頑張つて。その姿をみることで、自分が今この場所で頑張ることが、自分自身の責任なんだと思う。乳児院にいる、ひとりひとりの子ども達、障害をもつ子、虚弱な子、接すれば接する程難しいなあと感じてしまう。

里親に引き取られる子、親元に帰る子、養護施設にあがる子。退所した子ども達の生活はほとんどわからないけれど、それでも時々たずねてきてくれる子が、元気に大きくなつていたらホッとする。いろんな子に出逢い、そのたびに四苦八苦させられ、時にはこちらの感情で怒られる子ども達は、まさに迷惑な話であらうけれど、それでも、これからの子どもたちと一緒に育つていけたら、などとはやはり思う日々。

私が市芦の三年間で、思ったことと、学んだことが、これだけのものがあるんや。つて胸はついていえるのは、今の自分、これからの自分なんだ。と思うから。



私が二つ年下の弟と二人で暮らすようになったのは、去年四月。父と二度目の母が離婚。父と弟と三人で、母のマンションから今の部屋へ越して来た。六畳・三畳・台所・押入に、タンス三本・食器棚・ミシン等がおかれ、親子三人で寝るのがやつとの広さ。青魚の干し物、かしの肉、畑まで買いに行く格安の野菜を食べ、冬は、すきま風に悩まされながら、月に一度の父の帰宅を待つ生活は、明らかに私たちをいらだたせている。幸い気の利いた親戚が衣類と保存食をカンパしてくれる。ガスも電気の水道もケチつて、安い家賃で生活している。収入基準オーバーしている私の家族も、気を抜くと食べられなくなるのは、他の奨学生と同じだ。

父の倒産、そして大阪へ

私は昭和三十九年生まれ、両親の結婚は三八年だ。父は、父の兄を手伝って祖父

奨学金に張り付く私の生活史

第一九回卒業生 S・K

弟との二人暮らし

出、病気、ノイローゼ、貧困、サラ金、未婚、未成年の母、等。様々な事情をかかえながら、乳児院に入所してくる子どもたち。わずか数ヶ月、一歳でありながら、その影響をマトモに受け、様々な姿をみせる子どもたちである。父親ノイローゼ、虐待、離婚の中、顔に火傷の傷を残し入所してきた子。親からはなれても泣くこともなく、部屋の隅でジッと周囲の動きをうかがっている。言葉も声もほとんど出ず、笑顔もみられない。しかし半月、一ヶ月と経つと、段々と表情もやわらぎ、子ども同士で遊ぶ姿もみられる。それでも、人一倍、はじめての人や場所を不安がり嫌がる姿はなかなか消えることはない。一歳を過ぎたばかりの、最も甘えたい時期の頃に親と切り離されてしまった子どもに対して、少しでも落ち着いて生活できるように環境を整えていくことが自分達の仕事だと思いながらも、現実はまだならない。

24時間の交替勤務体制の中で、一日のうち何度か職員が入れ替わる。夕方、子どもたちが淋しくなるであろう時間帯に職員のほとんどが帰っていく。そんな毎日が繰り返される中で、自分が「親代わり」又「(五年目)保母」としては、あまりにも未熟すぎるのでは、と思うことも多い。高校のとき、「責任のもてる保母に」と言つた、その自分の言葉の

の残した陶器工場の建て直しに賭けた。母は、みなし子で中卒のレツテルのため、結婚できないものと思い、一人で食べて行くため、洋裁の修行を十年間やっただ。結婚が実現したとき、「今までよう辛抱したなあ。ほんまにお嫁にいられて良かったねえ。」と大いに祝福された。

しかし、父の工場は景気が悪くなる一方。父は工員に賃金を払うため、自分は無賃で働き、在庫の茶碗を、農家で食べ物のために、お金を糸のように細く使い生計を立てた。私が生まれても、粉ミルクも買えなかった。

父の工場が倒産したとき、一家は無一文で大阪へ出てきた。母は、身内のいない田舎で、父方の親戚に冷たくあしらわれてきた。弟は生まれて間もなかった。父は工員になり、家族はその社宅へ転がり込んだ。

その日暮らした中、母は三度墮胎していた。貧乏だったから生まれてきても養えなかったのだ。

二、三年後、父は転職。他の会社の事務所の隅に机二つ分間借りした小さな会社。一つの机は社長、もう一つは父のだった。父は昼も夜も、長距離トラックのように遠くへ荷を運んだ。小さな会社だったから、高速道路はあまり利用できなかった。普通よりうんと時間と労力

が必要だった。留守続きの家では、母が四才の私と二才の弟の守をし、家のことをきめ細かにやっていた。家は、ナメクジが出そうな高温多湿。最近訪れたときも不衛生な大阪の片田舎のままであった。私はすすけた文化住宅の中でも、両親の保護の中、結構何も知らずにのびのび暮らしていた。

母の死

母は十年前の二月、私が七才の時に死んだ。「白血病の末期、内出血で目の上をうす青に染めた母が、チラシ片手にシヨッピングカーをひき、一円の無駄を惜しんで買い物に出かける。」こんな思い出の中から、私は、その当時の生活の様子や、母がそこまで頑張った理由を突き詰めないといけないと思う。

私と弟は、同年三月から八月末にかけて田舎に預けられた。父の転職もこの頃だ。田舎にはすぐなじんた。兄弟同然のいとこ。たくさんのお友だち。しつけにも教育にも力を入れてくれた叔父と叔母。田んぼや山、川、野原の季節の移り変わるなか通学ことも、家の中でみんなと遊ぶことも魅力的だった。預けっ子になつた寂しさもなく、芦屋へ帰ることも望まなかった。

芦屋へ戻ってきたから、一年の時いた

た。悔し泣きして自分でお粥を炊きに起きる私であったが、私と母と弟が三人で仲良くしていくのを期待していた父に、グチも言えずじまいでいた。

そんな風だから、学校でも力り力りしていた。私の周りにいる人も、そんな私を見て自分の悪い思いをしていたに違いない。力り力りする気持ちがエスカレートすると喧嘩になり始める。小学三年の頃からそういう傾向はあったが、中学になるとそういうトラブルから逃げ出すため、学校をさぼることを覚える。母が通勤した後の誰もいない家の中、誰からも離れて我に返り、日記を付けたら、考え事をしたりする大事な時間で、泣くことも遠慮なしだった。

嫌なものから逃げようとする気持ちには、勉強の方にもはつきり出た。好きな科目の徹底した勉強と、目も向けない嫌いな科目の差の開きが、私の性格を露骨に表している。そして高二の時は欠席の穴埋めを嫌ったため、得意科目まで穴が開き、嫌いになった。

生活史に向き合う

自分で調べたり思い出したりして書きまとめた私や私の家族の歴史はだいたいこんなものだ。「私が、今やってる家計の切りつめ」のことや、「父の頑張り」

を見て、奨学金を申請しようとするとき、「家族の今までの生活と闘ってきた姿」を知らなければならぬと思ひ、この文をまとめた。何十枚も下書きし、この文をまとめる中、いろいろなことを考えた。

父は、体にハンディを持っている。むかし単車で事故をし、頭蓋骨を折って生死の境をさまよって以来、右半身のしびれ、耳鳴りがずっと止まない。そんな状態で、今でも昔と変わりなく人一倍きつい労働をしている。

出社するとコンロにお湯を沸かして、掃除をする。帳付けをして荷の点検をする。車で東京を走り回り、小売り屋や百貨店をまわるが、外国の飾りもの等を売る商売だから、だんだん不景気になってるので、父はその分無理をして売りにまわっている。一日の大半を外で過ごし、帰って来て再び帳付け。荷が入れば運び入れる。同僚のいない東京の支店で、父はこういう仕事を自分だけを頼りにやっている。お茶を汲んでくれる人もいないわけだ。

単身赴任のこの四年間も含め、家族養うための父の頑張りはやっぱすごいと思うし、尊敬もする。しかし、父に対する不満や怒りがなかったわけじゃない。母を失って長い間悲しい思いをしてきた私にとって、母のことを気遣うこともな

クラスに戻ったが、尻込みしていた。抜け出ていた五ヶ月の間に、私はみんなに忘れかけられているようだった。

三年に上がると、母の替わりに面倒をみてくれた祖母に反抗するようになった。昨日まで顔も知らなかった祖母に、自分の生活や母の守って来た家庭を荒らされるような気がしたからだ。

母を失った生活

一人でいることが好きで、そのくせ寂しがりな私だった。七年前、祖母と入れ違いに新しい母が入ってきた。小学六年で、もう母に甘える年でもなかった私は、弟みたいにその母になつてなかつた。欲しいと思つていた母親だが、死んだ母を何度も思い返す私には、新しい母にどう甘えたらいいのかもわからなかった。中二の終わり、父が東京へ単身赴任。間に父がいなくなったせいで、いかげん生意気を言う年頃になった私と、長い間女一人で暮らしてきた厳しい母が、冷たくぶつかり合うようになった。

私を一人前の女として手厳しく風呂洗いや自分のものの洗濯、トイレ掃除等を言いつけてきた母は、冬場、湯上がりの後の洗濯、風呂洗いで湯冷めし、熱を出して寝込む私に、「生活態度が悪いから風邪ひくんや」とも言えるような人だった。

く仕事に出かけていってしまう父が、母の病死を招いた人であるかのように思え、父の所に嫁いだばかりに楽しらんと死んでいった母を哀れんだ。父にこういう恨み言をはつきり言ってしまうことは、私にはできなかったが、小出しに責めてみると、父は辛そうな顔をする。父が何故そんなに仕事ばかりをしていたのか、私は長い間わからずじまいでいたが、母にはわかっていたと思う。

父は、自分をしんどい目に追い込まないといけないぐらい働かなければならなかった。薬をすれば家族が苦しむ。だから、安心して家のことがまかせられる母は父の支えだったし、母にとつても自分や子どもである私たちのために一生懸命頑張る父は支えだったに違いない。

私はそれも知らずに、母の淋しい気持ちもかえりみず働く父は、冷たい人だと思ひ、その上、父に家事を言いつけられた私は、母と同じ父の被害者なのだと、父に恨みを持つようになった。

そして今、一通り父に対する怒りを爆発させ終わった頭で考えてみると、「お母さんがかわいそうだ」なんて思い続けたけれど、本当のところ、私がかわいそうに思っていた人物は私自身でなかったかと、問い直してしまふ。

私にとつての奨学金の意味

私が二年の末、初めて奨学金を担任の先生から進められ、父の現状と家計を考え出したところから、集会や文を書く活動の中、父と母に対しての感情的なものの考え方をしようになり、そして最期に、母と父が支え合つて生きてきたことを知り、自分の身かわいさ故に、荒れたり父や弟を恨んだりしたこの一年半の間のことをじっくり考えてくるようになったのが、私のこれまでの奨学金活動だった。そして、一年の弟も今そういう活動をしようにして作文に取りかかっている。彼も私と同様、高校にいる間は奨学金を取つて勉強し、卒業後は自分の働いたお金で勉強することを考えている。

奨学生や私のように奨学生になろうとしているものにとつて、奨学金は経済を助けるだけでなく、自分たちのことを見直すためのものだと思う。奨学金を取ろうとしてからの私が学んだことは多いし、学んでこそ奨学金が生きてと思う。だから、奨学生は、奨学金を学費や生活費に充てるだけではなく、「奨学金は何のためのものか」を考えるべきだし、奨学金を渡す側も、制度に沿って手渡すだけでなく、奨学生の一人ひとりを、どんなことを考えながら生きてきたのかを考えてこそ奨学金がいかされると思う。

9月9日 午後2時

「市芦があつて何が悪いねん！市民集会」 参加の呼びかけ

芦屋市と芦屋市教委は、市芦高校と市芦高校の生徒の存在を全面否定し、市芦高校を廃校にしようとしています。

1986年に始まった「教育改革」は、「成績の悪い子は公立高校へ来るな！」というものでした。公立高校へ入れなくてもお金があれば私学へ行けます。では、成績が悪くお金もない子はどうすればよいのでしょうか。「そんな子はどうなってもしらん」というのが「教育改革」でした。

「教育改革」の締めくくりが、市芦廃校です。成績の悪い子が来る市芦高校は無くしてしまえというのです。

定時制高校とともに芦屋教育の底辺を支えてきた市芦高校を廃校にさせるわけにはいきません。市芦高校を求めてくる子どもたちを路頭に迷わせるわけにはいきません。

市芦高校の存在の大切さを知る者が、市芦高校の存続の必要性を訴えるしかありません。

市芦高校の値打ちを知る私たちは、9月9日、芦屋市民センターに集まって、「市芦高校の存続」を求める集会を開きます。

市芦高校の存続を求める皆さんの参集をお願いします。

市芦があつて何が悪いねん！市民の会

連絡先：市芦高校内 吉村・森村・神谷 0797(32)1131

日時：9月9日（日） 午後2時～4時

場所：芦屋市民センター 401号室